

「名もなき世界」

作□長堀博士

登場人物

訪れた女□

部屋の男□

部屋の女□

間違っ来て来た女□

時：現代。

場所：部屋。部屋は上演の都合によって、どのような部屋でも良い。机、椅子など、演出上の必要に応じて使用することとする。

「ピンポーン」の音。

そして、ドアの開く音がして明転。

部屋には「部屋の男」と「部屋の女」がすでにいて、戸口には女が立っている。ずっとゆったりした音楽が聞こえている。

1.

訪れた女「ただいま……」

部屋の女「……ん？　ただいま？　どうして／ただいまなんです？」

訪れた女「えっ？　だって、……あれ？」

部屋の女「まあいいわ、どうぞ、お入り下さい」

訪れた女「……」

部屋の女「どうぞ、その椅子に」

訪れた女「……」

部屋の女「お飲み物は何になさいますか？」

訪れた女「お飲み物？」

部屋の女「ええ。なんでも。ビールにでもなさいますか？」

訪れた女「いえ。アルコールは」

部屋の女「そう。ではコーヒートか。今、ちょうど良い豆が入ったばかりなんです。ブラジルから」

訪れた女「ブラジル」

部屋の女「リオデジャネイロ」
訪れた女「じゃあ、コーヒーで」
部屋の男（例えばビッグコミックでも広げながら）「僕も同じのを頼むよ」
部屋の女「はい」

訪れた女「あのう、この部屋は？」

部屋の男「僕の仕事部屋です。ご足労ありがとうございます」

訪れた女「いえ、あの、……手錠は、いいんですか？」

部屋の男「手錠？」

訪れた女「ええ。ちよつと疑問に」

部屋の男「したいですか？ 手錠？ そういう趣味の方？」

訪れた女「いえ／＼そうではなく、取り調べ室か牢屋以外では外してはいけない

のかと思って」

部屋の男「そうなの？」

部屋の女「さあ」（首をかしげる）

部屋の男「じゃあ、する？」

訪れた女「いえ、あの、（外してくれて）ありがとうございます」

部屋の男「はっは、御礼言われちゃったよ」

部屋の女、コーヒーを準備しながら鼻歌を歌う……

訪れた女「……あのう」

部屋の男「はい？」

訪れた女「私、何で呼ばれたんでしょうか？」

部屋の男「そりゃ話を聞こうと思ひまして。まあそう慌てず、コーヒーブレイ

クしてからってことで」

部屋の女「最初にブレイクっていきなり休憩時間ですか？」

部屋の男「駄目？」

部屋の女「ブレイクってブレイキと同義ですよね？ 走っているからブレイキ

踏めるんであって、まだ少しも進んでないのにブレイキはちよつと」

部屋の男「んー、じゃあ少し始めますか、ねえ？」

訪れた女「はい？ あっ、ええ……」

部屋の男「あなたは……、おっ、途中で名前を替えていますね？」

訪れた女「はい？」

部屋の男「改名してるでしょ？ 二十過ぎてから」

訪れた女「はい」

部屋の男「何ですか？ 名前なんて記号でしょう？ そんなの何だっていい。誰かに新しく付けてもらったんですか？」

訪れた女「いえ、本とかで調べて、自分で」

部屋の男「馬鹿ですかあんた？ 名前は他人が付けるものなのに。でしょう？ 名前は自分の為にあるんじゃない。他人の為にあるんですよ」

訪れた女「他人の、為？」

部屋の男「名前は他の人とその人とを区別して呼べないと困るからって、他人が付けるものなんです。で、最初に困るのが親だから親が付けることが多いってえわけです。それをあんた、自分で勝手に替えちゃったら周りが困るじゃないですか、どう呼んだらいいか」

訪れた女「ええ。あ、でも、あの時は少しでも自分の運勢を替えたくて」

部屋の男「運勢！ 名前です？ おめでたい人だあんた。改名なんて他人に迷惑かけておいて／自分の、生活に良い兆候なんて現れるわけじゃないのに」

訪れた女「そんなこと！ 私、迷惑だなんて思いませんし誰も、そんなこと思っていないと思いますしそれに…、あの時はあれで、運勢が替わって良いことが沢山」

部屋の男「沢山？」

訪れた女「……いえ、言い過ぎました。沢山ではありませんけど、でも、少しは……」

部屋の男「で、こんなところに来てると。4つの殺人に係わった罪でね」

訪れた女「名前替えたのは昔の話です」

部屋の男「へー効果は期限付きですか？ おかしな話だー」

訪れた女「でも」

部屋の男「その名前を今も使ってるのに残念どえすねえ、こんなことになつてえ」

訪れた女（小さい声だが少し憎々しげに）「……名前、替えたくらいでそんなこと、言われるなんて……」

部屋の男「おや、少し感情が出てきましたねえ、けっこうけっこう。さ、じゃあ今度は本当にコーヒーブレイクといたしましょうか」

部屋の女「早っ」

部屋の男「でも、入れたてを楽しまなくっちゃ、ねえ？」

訪れた女「……」

部屋の女「はいはい」

部屋の女、コーヒーを入れて「どうぞ」って配る。

部屋の男は満足そうにコーヒースをすすする。

部屋の女「どうです？」

訪れた女「あ、ええ。いい香り」

部屋の女「そう、良かった」

部屋の男「ああ、そうそう、昨年ね、ネイチャー誌に面白い論文が掲載されたんですよ」

部屋の女「ネイチャー誌？ ビッグコミックの間違いじゃなくて？」

部屋の男「話の腰を折らない」

部屋の女「失礼」

部屋の男「ある小さな町でね、前の市長が無事任期を終えて市長選があったんです。で、その時に面白い実験をやった大学があったんです」

部屋の女「実験」

部屋の男「まだ誰に票を入れるかまったく決めていない人だけを集めて、条件反射の実験をやって、それでその人がその後／誰に、票を入れるか当てるってえヤツです。

実験されてる人はね、これから決めるわけです。

これからマニフェストとか読んでね。それで誰に投票するのか決める。でもその実験では本人が決める前にその人が誰に入れるか当てちゃうって言うんですね」

部屋の女「うまく行ったの？」

部屋の男「そりゃ、ねえ、ネイチャー誌に発表されちゃうくらいですから」

部屋の女「へー」

訪れた女「……」

部屋の男「あら、興味なし。まあいいや、でね、何が言いたいかって言うと、選挙で誰に投票するかは本人の、意思によって決定されているわけではない、ってことです。そういうのは条件反射で、要するに事前に決定されてしまっている。意志は関係ないんですよ。いや実はね、僕たちが意志を持って決定してやっていると思ってるものが多いが、ただの条件反射で／自分の、意志なんて関係ないって話です」

部屋の女「アクションだと思っていたことが只のリアクションだったと」

部屋の男「そう」

部屋の女「そんなの当たり前じゃない」

部屋の男「おっ、当たり前？」

部屋の女「私は自分の意志なんて幻想はとっくに見てません。だって自分の意志で決めていいんだったら／こんな、とこでの仕事とっくに辞めますし」

部屋の男「あらあら。そんなこと言って、もー」

部屋の女「本当です。ああ、なんとかならないかしら、この職場環境」

部屋の男「って言いながら僕だけをジツと見るのやめて下さい、僕が悪いみたいじゃないですか」

部屋の女「失礼。つい出ちゃって」

部屋の男「あなたはどうですか？ どう思います？ 自分は自分の意志で生きていると思います？」

部屋の女「いきなり漠然とした質問」

部屋の男「じゃ、例えば改名、名前替えたのは自分の意志、だったんですかねえ、あなた」

訪れた女「……たぶん、誰か、覚えてませんけど芸能人か誰か、名前替えた人がいて／それで、影響受けたのかもしれないけど／でも、ちゃんと自分の意志だと」

部屋の男「意志」

訪れた女「…ええ」

部屋の男「なわけじゃないじゃないですか」

訪れた女「えっ？」

部屋の男「なわけないって言ったんです／不幸な、女が不幸だと感じて名前を替えたって、そりやもうどう見たってただの条件反射でしょうに」

訪れた女「違います。自分で。…私、優柔不断だって見られるけど、でも違うんです。かなり慎重に色々考えてから決めて、行動しているんです／だから、色々遅いし／確かに、憶病って見られるならそうかも知れないけど／でも、自分で、色々考えて決めてるんです」

部屋の男「自分の意志で」

訪れた女「そうです」

部屋の男「って思い込んでるってわけですか、ただリアクション取ってるだけのくせに」

訪れた女「何も知らない癖にそんなこと！ なんでそんなこと！」

部屋の男「改名して宗教ハマった女が何言っても説得力ありませんよ。だったでしょ？ あの時も、両親とかみんな、あなたを辞めさせようと必死に説得した」

訪れた女「えっ？」

部屋の男「でも何言ってもあなたは話を聞かなかった。意志を持った選択？ 本当に今でもそう思ってます？ みんな洗脳だ、洗脳だって言ってますでしょうに」

訪れた女「私、洗脳なんてされてません。ちゃんと考えて決めました。あの時だって！ それに宗教じゃありません。みんな勘違いしてるけど、もっと科学的に、心理学とかちゃんと勉強して、それでみんな幸せになる方法を考えるってサークルで。同じ悩みや問題を抱えた人たちが集まって解決策を探るのは合理的だし、私、あの時は今までで一番幸せだって感じる事が出来て」

部屋の男「じゃ何で辞めちゃったの。5年も頑張ってき、ねえ、やっぱり駄目だったわけでしょ？ お金ばかり掛かってき」

訪れた女「それは……、彼氏が出来て、やめろって。だから……」

部屋の男「彼氏。ですか、……のちのご主人ですね？」

訪れた女「……はい」

部屋の男「ま、そっちの話は後回しにしましょう。順序が狂ってもね、仕方がありませんので、ねえ？」

訪れた女「でも、今さらそんな昔の話。それに殺人事件の話ならもうとっくに私、罪を認めてるつもりですけど」

部屋の男「いやいや、まずはこの昔の話が大事なんじゃないですか？ でしょう？ あなたさっき、名前替えたくらいでそんなこと言われるなんてって言いましたでしょ？ 覚えてます？ 自分で言ったの。でも名前替えるって、あなたにとっては何とかならぬ一大事だったんじゃないですか？ 何とか自分の人生を替えるたい／何とか！ 不幸から脱したい／幸せになりたい！ って見え見えじゃないですか改名って。そりゃ今まで自分は不幸だったと世間に表明するようなものだ、でしょう？ んで、アンテナ張ってる奴らから見たらビビッてくるんです。ビビッ、ですよ、ビビッ！ あなたはその後しばらく幸せになったつもりでしょうが／ま、向こうさんからしてみれば良い商売相手が見つかったってなもんでしようなあ。宗教じゃないって言いましたけど／何それ、みんなで幸せになる方法を考えるサークルですって？ んー、でもお金掛かったんじゃないですか、ぶっちゃけ。だって商売ですもん／向こうさんにとってはさあ」

訪れた女「投資です！」

部屋の男「投資！」

訪れた女「自分で自分を高める為には投資が必要な時も」

部屋の男「そう、投資ですか、ははは、便利な言葉だ、投資！ いいねえ、最高だ。んで、払ったお金に見合う見返りは得られましたか？ いやいや分かってますよ／投資ですもんねえ、優良株だと思って買ったのが

それが下がって大損なんて、ま、いくらでもある話ですしね、けっこ
うけっこう」

訪れた女「少なくとも！ あの5年間は自分は不幸じゃないって思って生きて
いけてました！ 友達も出来たし、仲間も。こんなふうには生きてるの
私だけじゃないって分かって、自分を慰めることだって！ 勇気をも
らったんです。なんとか生きていける勇気を。なんであなたに、何も
知らないあなたにそんなこと言われなきゃ！ こんな取り調べ！ さ
つきから殺人事件とは全然関係ない話っ！」

部屋の男「……ありやいや、そんな怒んなくても、ねえ」

部屋の女「ああ、分かります分かります。この人／人を怒らせるのほんと得意
分野なんですよね、本当。分かります分かります」

訪れた女「……」（無視）

部屋の女「あら？ なんか私にまで？ 嫌だとばっちり」

部屋の男「文句があるならネイチャー誌に言って下さいよ。それに書いてあっ
たんです。あなたが生きているのなんて只の条件反射にすぎないっ
て、ね」

訪れた女「……」（見る）

部屋の女「……言い過ぎ」

部屋の男「……そりゃ失敬」

音楽。溶暗……

タイトル「名もなき世界」

2.

明転。部屋の女によってコーヒーが片付けられる。

部屋の男、大きく伸びをしながら大欠伸をする。

部屋の男「……あっ、欠伸するとね、なんだか眠い人みたく見られますが／違
いますよ、大抵の動物は欠伸が目を覚ます合図なんです。さ、そろそ
ろエンジンかけましょうか、ってな具合ですね」

訪れた女「……」

部屋の男「……それでは、ま、そろそろ本題に入りましょうか」

訪れた女「……」

部屋の男（顔をうかがい）「……ね？ やっとお待ちかねの殺人の話です。すでに警察の色んな人にたくさん喋ってるとは思いますが、ね、僕は初めてなんだから『またかよ』、って思っても話して下さいね。会話。会話が大事なんです。人間ね、言葉でちゃんと伝わらないと伝わらないから。そういうことを怠ると結構、人生苦労するんですよ。そういうのはこの後一生刑務所暮らしになったって同じですから覚えておいて下さい」

訪れた女「……」

部屋の男「……ありや、何だか急に無口になっちゃって。まあいいでしょう／＼まず、第一の殺人についてなんですが……」

訪れた女「別に、話す事なんて……」

部屋の男「ありませんか？ そうですか？ まあ確かに、別にあなた自身が殺人を犯したってわけじゃないですからね／＼実際に、現場に行ったわけでもないし、話す事なんて高が知れてるでしょう」

訪れた女「ええ」

部屋の男「でもね、罪はあるんですよ、それは分かっているんですよ？」

訪れた女「……ええ」

部屋の男「通報の義務を怠った。それも1回や2回じゃないってわけですからねえ、軽い罪ではありませんよ。だってもし最初に聞いた時点で警察に通報していたら／＼その後の、何件かの殺人は未然に防げた訳ですからね、あなたの行動で救われた命があったんです／＼そりゃ、重い罪ですよ。ある意味ではあなたが殺したようなもんだ」

訪れた女「そうです。だからもう無期懲役でも死刑でも何でもいいので、決めちゃって下さい」

部屋の男「いやいや。決めちゃって／＼そう簡単には決められないのは……、ご存じでしょう？ TVドラマなどでお馴染みですよ、面倒くさいんです、結構ね。実際に行った行為に対してだけ裁きを下せば良いと僕も、思うんですけどね、どういう環境で育ったとか／＼どう、反省してるだとか／＼どんな、心の病を抱えているだとか／＼ああ……、そんなどうでもいいことで罪の重さが変わるって言うんですよ／＼本当！ 面倒くさい！ 情状酌量って言葉、聞いたことあるでしょ？」

訪れた女「私には、情状酌量の余地なんてないと思います」
部屋の男「どうして」

訪れた女「悪い、ことをしたから。悪いと分かって／それでも、やったから」

部屋の男（笑）「んんー、そんな素直に認められると／却って、罪が軽くなっちゃうんですけどね／どうせなら、私は悪くないって足掻いてもらった方が／反省の、色が見えないって罪も重く出来るんですが」

訪れた女「じゃあそうして下さい」

部屋の男「じゃあって、嫌いだな僕、そういう投げやりな発言。ここは一つ、真実でのみ罪の重さを量り直してみるっていうのはどうでしょうか？
ね？ だってその為にここに来てもらったんですよ／ここは、

……

ここはそういう部屋なんです。

本当の事を口にしてもらう為の、

その為だけの部屋。

誰でもが入れらるってわけではないんですよ。

厳しい審査があつてね、

それに合格した人だけが通される部屋なんです／あなたは……、

つまりそれに合格したつてえわけです♡」

訪れた女「……話している、意味が分かりません」

部屋の男「そうでしょう／そうでしょう。ま、それは追々理解していただくとして／そろそろ、話していただきましようかあなた、ご主人の話
を」

訪れた女「……修司さん」

部屋の男「最初の告白は1998年つまり、6年前の夏、ですか……」

頭痛に悩まされるように頭を押さえる訪れた女。それを振り払いながら。

訪れた女「……熱帯夜、蒸し暑い夜でした。夕方に降った夕立ちが中途半端で／少しも、気温が下がらないばかりか却って湿度を上げてしまつて／拭っても、拭っても汗が流れてくるような／そんな、夜の話／夫は……、あの人はいつものように仕事からの遅い帰りで／私は、全然役に立たない古くなったクーラーを買い替えたいと強く、言うつもりで準備していました。でも帰ってきた夫は今まで見たことのないほどひどく、怯えていて私は、驚いてどうしたの？って」

部屋の男「それで殺人の告白が始まったのですか？」

た。顔は青ざめ唇も、青くなって肩が震えていました。自分の思い通りにならないことがあると殴ったり蹴ったりすることまである強い、男の影はどこにもありませんでした／その人が、泣くのです。

泣いて謝るのです。すまない。悪いことをしたと懺悔するのです／私も、一緒に泣きました。一緒においおい泣いて抱き合いました／そして、頭の中ではどうしたらこの人を、こんな馬鹿で弱くてどうしようもないこの人を助けたらいいか／そればかりを、一生懸命考えていました。私はその時は、母性本能が働いたのだと思いました」

部屋の男「その、時は……、つまり今では母性本能ではなかったと考えているのですね？」

訪れた女「はい。それがそうじゃないと思います知らされたのは、2人目か、3人目か、はつきりしません／でも、それ以降の時です」

部屋の男「2人目……、ちょうど2年後。早いですね、やはり夏、でしたか。

ご主人はまた同じようなことを繰り返し／そして、同じようにその人を殺してから同じように、告白をしたのでしたね？」

訪れた女「はい。その時はクーラーも買い替えて蒸し暑い夜ではありませんでしたが／でも、ほとんど同じだと考えていただけで構いません」

部屋の男「その時もあなたは、同じように対応したのですか？」

訪れた女「いいえ。その時は違いました」

部屋の男「違った。それはどんな風に？」

訪れた女「最初に茫然と立ち尽くしたのは同じでしたがその時は、私は怒りました」

部屋の男「怒った？」

訪れた女「はい。怒って怒りに任せてあの人を叩きました。何度も。力いっばいに何度も叩いたのです。腕が痛くなるくらいでした」

部屋の男「どうして怒ったりしたのですか？」

訪れた女「どうして……、当然だと思いますけど」

部屋の男「また人を殺してきたことに対して怒ったのですか／それとも、2度目の浮気に対してですか？」

訪れた女「それは……、そのどちらとも言えますし、どちらでもないと思います」

部屋の男「どっちでもない？」

訪れた女「はい。してきた内容ではなく、同じ過ちを二度繰り返した、というようなことに対してだと思います」

部屋の男「ほう。それで叩いて、ご主人はどうしましたか？ 暴力に任せる性格の人だったと思いますすがやはり、反撃されましたか」

訪れた女「……いいえ。あの人は何も。ごめんとずっと謝っていました。何度も謝っては許しを請うっていました。泣きながら。涙を流しながら。床に頭を擦りつけたり／あるいは、抱きしめようと腕を伸ばしたりしました」

部屋の男「それで」

訪れた女「それで……、私も結局は、最後には涙を流しました。叩きながら一緒に泣き、腕が痛くなってどうしようもなくなくなるとあの人を抱きしめました。あの人が可哀そうで涙が止まらなくなりました。なぜそんな気持ちになったのか、今考えるとよく分からないのですが、でもあの時はあの人のが可哀そうで可哀そうで仕方がなかったのです」

部屋の男「それはやはり、母性本能だったのでは？」

訪れた女「いいえ。確かにそういう部分も少しはあったかも知れません。でも、私は……、これは後から考えたことですが、快感を感じていたのだと思います」

部屋の男「快感」

訪れた女「ええ。どこかで自分の役割に、あの人との立場に何か、恍惚とさせるものがあつたと思いました。気持ち良くなっていったんだと。そんな考えが出てきてからは自分で、自分が恐ろしくも、情けなくも感じるようになりました。でももうあの時にはそういう世界に自分は足を突っ込んでいたのだと思います」

部屋の男「そういう世界とは？」

訪れた女「そういう、世界です。そういう、名づけようもない、この世の中に存在はするけど普通は、入ってはいけない別の世界」

部屋の男「ほう。それで結局は通報もせず、ご主人を許してしまった」

訪れた女「約束させました。もう二度と、こんな過ちは犯さないと約束をさせました」

部屋の男「あなたはその時、その約束を信じましたか？」

訪れた女「えっ？ ……よく分かりません。信じたとは思いますが……」

部屋の男「思うの、ですが？」

訪れた女「いえ。3年後、3人目の事件があつた時私は、もう最初の2回のようには驚かなかつたと言うか……」

部屋の男「同じことがまた起こるのではないかと覚悟していた」

訪れた女「覚悟……、いえ、こんなことは二度と起きてはいけないと、恐ろしいことだと考えて、怯えていました。覚悟なんてそんな」

部屋の男「では？」

訪れた女「…誤解を恐れずに言うなら、きっと、期待していたと言うのが正しいような気がします」

部屋の男「期待？ 怯えていたのでは？」

訪れた女「怯えてもいたし、何か、絶対にもう二度とそんな目には遭いたくないと思うのと同じ時に、いいえ、期待と言うのは言い過ぎだと思います。でも、……ごめんなきい。うまく言葉には出来ません」

部屋の男「そうですか。いやいや、すべてを言葉に出来るわけではありませんからね、けっこうけっこう」

3.

と、それまでの間に、部屋の女の手で、部屋の男と訪れた女の前には小皿に切ったバームクーヘンが置かれている。

部屋の男（部屋の女に）「……ところで君…、君だよ、君…、この僕の目の前の皿はなんだい？」

部屋の女「見て分かりませんか？ バームです」

部屋の男「バーム？ クーヘンは分かってるよ／＼なんで、このタイミングで置かれているのかな」

部屋の女「甘いもの食べると頭の回転早くなるって、聞いたことありませんか？」

部屋の男「すでに早いから必要ない。あのね、こういうものはさっきのコーヒーブレイクの時に出せばいいと思うのだけど」

部屋の女「えっ？ バームですよ」

部屋の男「そうだよ、クーヘン」

部屋の女「だって甘いじゃないですか」

部屋の男「ピタリでしょ、カフェに。カフェに」

部屋の女「えっ、だってコーヒーに砂糖とミルク入れるでしょ？」

部屋の男「僕は入れません」

部屋の女「私は入れるんです。世の中の95パーセントの人は入れるんです」

部屋の男「嘘」

部屋の女「はい。言い過ぎました。でもせっかく砂糖入れてコーヒー甘くしても／＼甘いものと、一緒じゃあ結局コーヒー苦いじゃないですか。無駄でしょ無駄」

部屋の男「だから僕はブラックなんです」

部屋の女「コーヒーとバームは絶対別々に出すべきだと思うんです」

部屋の男「無視ですか僕の意見は。ねえあなた、あなたはどう思います？」

訪れた女「私？」

部屋の男「先程確か、砂糖もミルクも使ってませんでしたよね？」

訪れた女「ああ、ええ」

部屋の女「この部屋での力関係を考えて」

訪れた女「……こ、コーヒーと、バームクーヘンは……、別々で」

部屋の女「ほーら」

部屋の男「えっ？ あれ？ 何で力関係考えて僕が負けるんですか？ 心外だ

な、まったく」

部屋の女「時代よ時代」

部屋の男「ほう、女が強いと、ふーん僕はね、こう見えても結構古い人間で

すからね、いや認められないなあそういうの。例えば僕が自分の女に

浮気なんてされたら、いくら温厚な僕でもね、殴り殺しますよ、そん

な女は」

部屋の女「まあ怖い。ばれないように気を付けますわ」

部屋の男「ってお前は俺の女じゃねーだろ！」

部屋の女「こっちこそ願ひ下げです！」

部屋の男「いやいや、今の発言おかしいから、てんで意味通ってないから」

部屋の女（訪れた女に）「でもねえあなた、なんであなた自分の、旦那をぶっ

殺そうと思わなかったの？ この人みたいに」

訪れた女「ぶっころ……？」

部屋の女「だって自分の身は自分で守らないと」

訪れた女「守るって……？」

部屋の女「だってあなたの旦那、思い通りにならないと暴力振るうし／都合

が、悪い女は殺しちゃうし／自分だって、そりゃ危ないわけでしょ

う？ いつその矛先が自分に向くか分からない」

訪れた女「ああ、ええ、言われてみればそうですね」

部屋の女「身の危険を感じてなかったんですか？ 一体どうして？」

訪れた女「……さあ」

部屋の男「この人はね、自信だけはありますよ／自分だけは、大丈夫って」

部屋の女「自信？ どこにも根拠なんてないの？」

部屋の男「何言ってるんです／自信に、根拠が必要ですか？ 自信がない人は

根拠が百あるうが二百あるうが自信がないし／自信、満々の人は根拠

なんてなくても自信満々でしょうに」

部屋の女「ああ、そう言えば」

部屋の男「この人は自分が殺されるなんて方向の事は考えたこともないでしょう」

訪れた女「自信なんて別に。ただ、何て言うか、他人じゃあないから」

部屋の女「他人じゃない？」

訪れた女「別人じゃないって言う様な。自分で自分を、まるで他人を殺すようには殺せないって言ったらしいのかしら。うまく説明できませんけど」

部屋の女「やっぱ、ラブ！ ですか」

訪れた女「ラブ？」

部屋の女「愛の事です。ラブ・イズ・フォーエヴァー」

訪れた女「いいえ、それは違うと思います」

部屋の女「えっ！ 愛してなかった？ じゃなくて、愛されてはいなかった」

訪れた女「たぶん、両方。愛とかそういうのはちよっと」

部屋の女「えっ！、じゃあ旦那との間には何があったんです？ 浮気女を殺す夫とその殺人を許す女の間には一体何が」

訪れた女「……」

部屋の男「なんにもありませんよ。ねえ？ 特別なものは何も、人と人の間にはなーんにも。だいたい愛っていうのは外国からやってきたキリスト教的な考えですよ。ニッポン人の私たちには使いこなすのが大変困難な概念です。それは忘れましょう／歴史を、学ぶほどの時間は今はありませんからね」

訪れた女「あの人が、あの人が私をどう思っていたのか、考えても私には分かりません。でも私は、好きだったのだとは思いますが。何を、とか、どこを、とかはうまく説明できませんけど／でも、好きは好きでした。それは確かです」

部屋の男「で、3人目の時もまた、同じように許したってわけですね？／結局、同じようなことが、起こって」

訪れた女「……え、ええ」

×××

訪れた女「……3年と数カ月が経過していました。秋でした。金木犀が街中に匂っていてそれが、むせ返るような時期でした。部屋に帰って来た時すでに、帰宅していたあの人の姿を見た時／何が、起こったのかすぐに察しました。衝撃が何もなかったと言えば嘘になります。けれど今

度のそれは、とても静かで重く、ひやっと冷たくて／何かを、聞かされる前に私の頬には一筋スーって、涙が流れました。私の方から言ったのだと記憶しています／『また、やったのね？ 同じことを、同じ過ちを、他の女と寝てそして、また殺した』、そこから先はまるでテープを巻き戻してもう一度見ているみたいに／まるで、前と同じことの繰り返し。……愚かで、くだらない、どうしようもなく悲しくて／それでいて、なぜだか可哀そうで可哀そうで仕方がない／ある意味では、あの人が愛(いと)おしくて、叩きつかれた腕で最後には抱き合いながらおいおいと、泣き始める、おいおいと、声を出して嗚咽して、涙で顔をぐしょぐしょにしながら抱き合い、頭の芯が痺れてすべての感覚が麻痺しておかしくなって……、

ああ私は、この時には確信し始めていたのだと思う。今までは曖昧にしか考えていなかったことがこの時には、確かにそれはあると……」

部屋の男「それ、とは？」

訪れた女「それは、生きているという実感。普段、私と世間との間には膜のようなものがあるんです。透明で目には見えないけれど／でも、しっかりととした質感のある／私と、この世界とを隔てている膜。膜……その所為で私は今まで、生きているという実感を感じることが出来ませんでした。ただ、あの時だけは、あの人が泣き、私に許しを請い／私に、ひどく何度も叩かれ／それでも、力なく泣いてオロオロ謝る姿を見る時だけ、一緒に抱き合いおいおいと泣く時だけはスーって、膜が消えて私は、生きているって実感を感じることが出来るんです。あの瞬間だけ！ 今まで生きてきて／あの、瞬間だけの感覚！

それはきつと、禁断の木の実。普通なら食べられない／食べちゃ、いけなかった甘い果物。私はそれを食べてしまったのだと思いました。だから、私には、もうこの時点で、きつとあの人と同じくらいの罪があったのだと思います。十分すぎるくらいいの／重い、重い罪が／この時すでに」

×××

部屋の男「それ、で、もう今度は自分の手で人を殺す、ということに躊躇い訪れた女「えっ？」

部屋の男「だから、4人目の、とうとう自分の手を血に染めた最後の、事件についての話ですよーん」

訪れた女「4、人目……いいえ。そんなことは。躊躇ってないなんて、そんな……でも、何を言われても私は、否定できない。否定しちゃいけないって思います。すべてを受け入れなきゃって、自分の罪を。自分の犯した罪を」

部屋の男「ふーん、それはそれでムカつきますがね、僕としては」
訪れた女「えっ？」

部屋の男「ムカつくって言ったんです。でしよう？ あなたは今、何でも、何を言われても受け入れるって言ったんです。罪って言葉を使ってね。でも罪ってそういうものですか？ 思考停止で『私が悪うございましたどんな、罰でも受け入れまーす』って言う様な、そんな簡単なものですか？ ゴミ箱にゴミ捨てるみたいに投げやりな受け入れられ方されてもねえ／それで、それが罰を受けたことになるんでしようか？ もっと苦しんでいただきたいなあ僕としては」

訪れた女「苦しむ……これ以上……」

部屋の男「ええ。今以上にね」

頭痛に悩まされるように頭を押さえる訪れた女。前の時より激しく、苦しそう。

4.

間。しばらくすると、いつの間にかビッグコミックを読んでいた部屋の女が笑い声を上げる。

部屋の女「……あっ、すみません、思ったよりこの『ネイチャー誌』が面白くて」

部屋の男「ん？ そんなに面白い話、ありましたっけ？ 笑うほどの」

部屋の女「えっ？ あるから毎週読んでいるんじゃないんですか？」

部屋の男「いやいや、ただの訓練ですよ」

部屋の女「訓練？」

部屋の男「僕は毎週12冊／月刊誌を、月に7冊は読んでいるんですがねえ／例えば、一つの雑誌に平均10本の話が入っているとしましょう。す

るとつまり毎週120本／月に、換算して200本近いストーリーを同時進行して記憶して読んでいるってことになるわけです。これは記憶力を維持する為の立派な訓練なんですよ」

部屋の女「とても無駄な訓練に思えるのですが気のせいでしょうか？」

部屋の男「そんなことありませんよ／老いと、共に確実に脳は衰えていくのです／日ごろの、訓練が大事なんです」

部屋の女「それで漫画？」

部屋の男「漫画も一つの文化でしょうに。だいたいこの人みたいに重要なことを忘れっちゃうようになったらおしまいでしょう」

部屋の女「女性に老いなんて言葉使うのは失礼ですよ」

部屋の男「使ってませんよ。使ったのは今のあなたが最初です」

部屋の女「あらそう？ それは失礼」

訪れた女「……重要な、こと？ 何の話ですか？」

部屋の男「ほら、これですからね？」

訪れた女「えっ？ 私、覚えてないことなんか……」

部屋の男「そうですか？ では4つめの事件の話に移りましょうか。ね？ あなたがどうとう女の部屋に向くことになった4人目の、事件／た、1年後のことでしたねえ今度のは」

訪れた女「……はい。あの人が帰ってくるなり、言ったのです。いつものように憔悴し切った様子で／でも、ひどく困った顔をして慌てていました、『殺せなかった』と」

部屋の男「殺せなかった！」

訪れた女「首を絞めても気絶しただけで死んだようではなく、だから台所から包丁を持ってきて手にしたけど急に、怖くなって、震えて、何も出来なかったと」

部屋の男「それで」

訪れた女「それで逃げて戻ってきてしまった／私、何とかするって。私が何とかするって／あの人に」

部屋の男「言ったんですか？ そんなことを」

訪れた女「ええ。まるで病気みたいに震えていたんです。痙攣？ 本当、このまま死んじゃうんじゃないかと思うくらい／ひどい、震えて。私が何

とかしないといけないと思いました／私が！ この人を救うのだと思
いました／それが、使命だと」

部屋の男「使命」

訪れた女「はい。昔、教わったんです。この時に思い出したんです／人には、
使命があるって。人の一生にはいつか必ず使命が訪れるって／いつ、
訪れるか分からないけど／でも、そんな時が来たら、それは仕方がな
いって」

部屋の男「仕方がない？」

訪れた女「どんなに抗(あらが)つても避けることが出来ない。モラルとか社会
のルールとかに触れても、自分の価値観や一生を揺るがすようなこと
でも／でも、やらなくっちゃあいけない。それは自分を越えたもつと
大きな流れで／運命だって。どうしても、やらなくっちゃあ……」

部屋の男「使命、運命。命と言う文字が入るだけでこうも人は魅了されるもの
でしょうか？」

訪れた女「魅了？ そんな素敵なものではなく」

部屋の男「大きな事件を起こす人は皆、それが使命や運命だと言うものでは
／そんな言葉で、自分自身の選択を正当化しようとする。だいたいあ
なた、さっきは自分は意志を持って生きているんだって言ったばかり
でしょう／それが、今度は運命ですか？ 自分の意志ではなくもつと
大きな流れですか？」

訪れた女「別に。自分の意志じゃないなんて言っただけは」

部屋の男「同じですよ。さっきからあなたを見てるとね、もうまるで、自分は
被害者みたいな顔ばかりしている。自分が悪い自分が悪いと言いな
ら／でも、自分は加害者って自覚がどこにも感じられない。でしょ
う？ 同じ過ちを繰り返す自分の夫を弱くて愚かだと言いながら自分
だって、同じ過ちを繰り返しているのにその愚かさは、まるでそこに
美学でもあるかのようにモノガタリにしてみました。

本当に弱くて愚かで、ドウシヨもない駄目人間で／自分勝手な、美し
い理由をくっ付けては自分の悪を正当化し続けていたのは一体、どこ
の誰でしょうか？」

訪れた女「……」

部屋の男「ありや、また黙っちゃいましたか？ まあいいでしょう、で、それで、行ったのですね？ 彼から聞いた女の部屋に。一人で」

訪れた女「……あの人は、もう行きたくない。怖くて行けない。だから、私一人で」

部屋の男「ナイフをカバンに用意して」

訪れた女「手袋と、何か拭くことがあるかも知れないと思って布と、それと、もしかしたら火を付けることになるかもしれないって思って、あの人の、ジッポのオイルの缶と、ライター」

部屋の男「用意周到ですね。けっこう冷静だ」

訪れた女「いいえ。冷静じゃありませんよ。ずっと震えが。頭も真っ白で、でも、とにかく自分が頑張らないとって無理やり奮い立たせて」

部屋の男「奮い立たせて」

訪れた女「……」

と、部屋の女、訪れた女に水の入ったコップを。

部屋の女「どうぞ。ただの水ですけど」

訪れた女、コップを手に、少し飲んでから……

訪れた女「……古い、コーポでした。駅で3つ離れた町の、街灯もなんだか少なくて暗い町の、駐車場や空き地に囲まれた古いコーポの、2階。

階段の手すりが錆びていて／表面の、塗料が乾燥して剥がれて、それを握ると手の中でパリパリ言った。でも体が重くて、手すりを握らないでは2階まで体を運ぶことが出来なかった。部屋のドアには鍵がかかっていないどころか／薄っすらと、半開きで、中を覗くと狭い玄関には派手なハイヒールやサンダルや、スニーカー、減茶苦茶に散乱して整理の出来ない女の姿が思い浮かびなぜか、苦々しく感じられました。（無意識的に）『ただいま』……」

部屋の男「ただいま？」

訪れた女「……、えっ？ いえ何でも。なんで／ただいまなんて…… 勇気を出して中に入ると玄関の鍵を掛けて／靴のまま、部屋に上がりました。女が倒れてた。下着みたいな恰好で、顔には化粧。勝手に若い女だと思ひ込んでいて／その女が、けっこう歳を取っているみたいなの少しショックを覚えました。でも、兎に角、やるべきことをやらな

くては。まずは生きているのか確かめる。急に目を覚ましてしまわな
いか注意しながら触ってみる。手首が見えていたから手首。ああ、で
も、生きているのか死んでいるのか分からなくて。脈とか全然分から
なくて、体もすごく冷たかったけど／でも、死ぬと人はどうなるの
か？ 生きているなら人間はどうなのか？ その時には全然／考えて
も考えても判断がつかなくて／それで、兎に角やらなくてとは思
いました」

部屋の男「やる？」

訪れた女「殺さなくては。だってもう引き返すことは出来ない。やらなくっちゃ、やらなくっちゃ。カバンから、布に包んだナイフを出して／その布を、ほどこいて、ナイフを手に握った」

部屋の男「クライマックスですわね」

訪れた女「で、私、そのナイフを、ナイフを……」

部屋の男「ナイフを？」

訪れた女「……どうして？ そんな、私……、」

部屋の男「どうしました？」

訪れた女「えっ？ 覚えて、あれ？ なんで？ 私一体どうしたんだろう？」

部屋の男「覚えてないんですか？」

訪れた女「そんなはずは。でも、……どうして、その時からの記憶が」

部屋の男「そうですね、んんー、残念。いやせっかくのクライマックスだったんですがね。いや、でも覚えてないんじゃないですかね。じや、お引き取り願いますようか」

訪れた女「えっ？」

部屋の男「だって覚えてないんですしよ？ ここは話を聞く為の場所ですね、話がないんだって／ねえ、仕方がないでしょ？ 諦めるしかない。どうぞお引き取り下さい」

部屋の女「どうぞ」

訪れた女「えっ？ そんな、だって…… 何か知ってるんでしょ！ 本当はあなた達、何か知ってるんでしょ！ だってさっき重要なことを忘れちゃうとか何とか、私、あれからどうして？ 何を私、したんですか！」

部屋の男、裏返して写真を1枚置く。

部屋の男「この裏返しの写真には4人目の、最後の被害者の顔が映っています。ああ、まだ触らないで。そんなに簡単に開いてもらっちゃったら勿体ない。せっかくですから当ててみましょうか。いや、あなたですよ、自分の事でしょ？ 自分で当てるんです」

訪れた女「誰って、だってあの時の女、の人……」

部屋の男「それは可能性の一つにすぎない。だって例えば、ほら、どうしてもその人を殺すことが出来なくて仕方がないので家に帰り、例えば旦那と口論になってカッとなって包丁でブスツとか、」

訪れた女「そんなこと」

部屋の男「あり得ませんか？ 本当に？」

訪れた女「そんな、こと……」

部屋の男「なーんて言いながら実は僕も、この写真に誰が映っているのか知らないんですよ。だって詰まらないでしょ？ 何もかも最初から分かってたんじゃ。ねえ？ ああ／ちようど、ナイフも用意してありましたっけ」

訪れた女「……！」

部屋の女、いつの間にナイフを準備して出してくる。

部屋の女「実物、ですよ」

訪れた女、出されたナイフを自然に手に取る。

と、突然呼び鈴が鳴る。ピンポーン。もう一回。ピンポーン。

部屋の女「……はい！」

戸口に一人の女が現れる。

部屋の女「あらどなた？」

間違って「た、ただいま」

部屋の女「ただいま？ さっきから何だか／ただいま／ただいまって」

間違って「だって、ドアに張り紙が。『必ずただいまと言う』って書いてあって、あの」

部屋の女「えー、いつに間にそんな張り紙。（見に行ったら剥がして持ってく

る）あら本当、（部屋の男に）こんな子供みたいな悪戯あ」

部屋の男「いやいや、何の伏線もなくいきなり僕と決めつけて」

部屋の女「だってこんなことする人／他にいますか？」

部屋の男「お母さん」

部屋の女「母さん？ 何の話ですか？」

部屋の男「僕のお母さんじゃありませんよ／お母さんは、その部屋で首を絞められ気絶していた、4人目の事件の」

訪れた女「あっ！ 張り、紙…！ ドアに、『必ずただいまと言う』って」

部屋の男「おっ、何か思い出しましたか？」

訪れた女「確かに、部屋のドアに、『必ずただいまと言う』って」

間違っ「あのう、失礼します。私は一体、どうしたら良いでしょうか？」

部屋の女「何なのあなた」

間違っ「あの、あっちの方で／部屋に、行けって言われまして、ここですよね？」

部屋の女「ええ、でも／早すぎです。まだ取り込み中。見れば分かるでしょ？」

う？ 呼ばれるまで廊下でお待ち… っていうか、何その格好！ シ

ヤツなんか血だらけでそれが人前に入る格好？（訪れた女を指し）この人を見習ってもっとちゃんとしてからお越し下さい」

間違っ「ちゃんとした格好って… あの、今、突然銃で撃たれたばかり

で、流れ弾かしら／血が、止まなくなっって、」

部屋の女「はい、じゃこれ。」

間違っ「絆創膏。」

部屋の女「とにかく、あとでお越し下さい。順番順番と。」

間違っ「は、はい。し、失礼、いたしました」

間違っ「来た女、去る。」

部屋の男「さあて、思い出しましたか？ あなたが行動を起こそうとした瞬間

でしたねえ／ちようど今のように！ 部屋の呼び鈴が突然鳴り始め

た！ ピンポーン！ ピンポーン！」

訪れた女「『た、だいま、ただい…、お母さん、ただいま……』」

部屋の男「まったく予期していませんでしたねえ／子供が、いるなんて。見ま

わしてみれば部屋の壁には『食事の前にはいただきます』、とか、

『朝起きたらおはよう』なんて張り紙がしてある。入口のドアには

『必ずただいまと言う』って紙があったではないか／何で、今の今まで気がつかなかったのだろう。どうして？
子供が。子供がいるんだ／子供が、
こんな夜遅くまで塾でも行つてたのだろうか？／その子供が、今、玄関の外に！」

訪れた女、その時を再現するかのようにナイフを構える。

部屋の男「構えましたか、ナイフを。玄関からやってくる脅威に対して」

はっとして、ナイフを下ろす。

訪れた女「…私、頭が真っ白で。どうしたらいいか……」

部屋の男「どうしたんですか？ でもどうにかしなくてはいけない！ 自分の手で、この問題を解決しなくてはいけない！」

訪れた女「どうしたらいいか、どうしたら、どうしたら……」

部屋の男「そうこうしている内にどうやら、合鍵を持っていなかったわけではないらしい／その子供が、持っていた鍵をドアの鍵穴にカチッて！」

訪れた女「でもどうしたらいいか私には！」

部屋の男「違うでしょう、もうこの時には！ 自分が何をすべきか気持ちは固まっていたはずだ」（裏返しの写真に手を）

訪れた女「何を、すべきか、違います、頭では何も考えていなかった！ 何も。空っぽのまま、ナイフを持つ手に力を込めて！」（構える）

部屋の男（写真を相手には裏を向けながら持ち上げつつ）「そして、ドアが開くのを待った。ほんの一瞬がこれほど、長く感じられたのは人生で、これが初めてでしたねえ？」

部屋の男、ゆっくりと持ち上げた写真を横目でチラリと見る。

ニヤッ……

その写真を表にしてテーブルにピシャって置く。

鍵が開けられ、ドアが開く効果音。女の子の『ただいま』の声（効果音）。

沈黙。虚脱した時間……

音楽。

訪れた女「……その日は私、とても疲れていました。仕事はパートでレジ打ちで、大したものじゃないんですけど。お客様からの苦情で1時間残業になったんです／別に、私の所為でもないのに。たまたま、対応に当たった私がお客様に怒鳴られ、何度も何度も頭を下げて謝って、私、部屋に帰った時はもうヘトヘトだった。ああ、帰宅した時点でヘトヘトだったなああって、急にこんな時に思い出して……（笑）なんて運が悪いんだろう／こんな時に、こんなタイミング。私にはもうどうすることも出来なかった。終わりだと思った。ドアを開けて入ってきた子の、女の子の顔を見たら、生きている無防備な生ものの『人間』を見た。私には、たった一つの選択肢しかもう残っていないのが分かった。人を殺す？ この手で誰かを？ そんなの私にはぜんぜん無理だった。だって……、

冷静になってしまったんです、その時私。冷静に……
突然の土砂降りに全身びしょびしょになった十一月の、深い夜のよう
に冷静に。

冬の湖のぶ厚い氷の下の、残酷なほど透明な水のように冷静に。

はるか太古から凍り続ける南極の、時間が生み出した永久凍土のよう
に冷静に／私は……、

私を知ってしまった。

だから、私……」

訪れた女、その時に自分がやったように、ナイフを自分の首に。

部屋の男、それをそっと止める。

そして、立ちすくむ訪れた女に、深々と頭を下げる部屋の男。

部屋の女は、女がやって来た時のように、戸口の横へと立つ。

訪れた女、何も言わず、ただ、その戸口から部屋を去っていく。

奥の壁には、例えば映像で一枚の写真が。

『訪れた女』の、葬儀にでも使われそうな一枚のスナップ写真。

部屋の男、自分の机に戻り、『ネイチャー誌』と呼んだビッグコミックを
読み始める。部屋にはゆったりとした音楽が。

部屋の女、部屋を片付け始める。

しばらくして、「ピンポン」「ピンポン」の音が聞こえ始め……

溶暗。

……幕。